門人の往生に結びつけんとしていることである。こうした考は文化時代に入りての事と看做されるが、慧琳時代・既にその萠しを見せている。それは異安心の教誡に軽く善知識の「御慈悲」によることが述べられる程度である。然るに文化時代となれば宗主は宗門人全体の信心に結びついた善知識、往生の如何を左右するかの如き善知識として、諸講者はかかる善知識観を宗門人全体の心に根強く植つけている。勿論、宗主を救主とする暴論にはなっていない。我々は宗学全盛期における斯る新たなる善知識観は、異安心調理に於ける強力な武器となり、更には学寮講者の地位を高めるのに役立つていることが知られる。要するに講者は宗祖・宗主・講者の三者一体なる考に基づいて、宗主は往生の善知識なることを強調し、それを以て異安心者を威圧する武器に、自己の地位を高めるために、宗主を利用せりと看做される。徳川封建的機構の影響の下に展開せる宗門の一面の姿と言うべきか。高倉一轍思想も往生の善知識の力説も明治初期まで力をし発揮て来たが、明治中葉となりて衰えている。

信心仏性について

稲葉秀賢

信心仏性ということは、宗祖が「信巻」三一問答信楽釈の下に、涅槃経の四無量心、大信心、一子地を仏性とする文を引用し、以て信心を仏性とあらはされたのに基くものである。ここに引用せられた『涅槃経』の理解については諸説区々としているけれども、一応四無量心は如来の大悲心を示し、大信心は仏因としての大悲回向の仏性、一子地は往生の果を意味するといっていいであろう。従てこの文が信楽釈の下に引かれたのは、それを私釈に対照すると、「斯の心即ち大悲心なるが故」というのは四無量心に相当し、「必ず報土正定の因を成ず」という報土正定は一子地に、「必ず……の因を成ず」というのは大信心に相当すると見られるのであって、此の経の引用はそれに依て大信心が如来回向のものであることを示さんとせられたのである。この意味に於いて『浄土和讃』には

「信心よろこぶそのひとを、如来とひとしとときたまふ、大信心は仏性なり、仏性すなわち如来なり」といい、『唯信文意』廿一左に

「この信心すなはち大慈大悲の心なり、この信心すなはち仏性なり、仏性すなはち如来なり」

とあるのもその意味である。

然るに『涅槃経』の一切衆生悉有仏性説は大乗仏教の極説であり、それは中国日本を通じて幾多の論諍をひき起した問題である。殊に宗祖が学ばれた天台家にあっては、三因仏性の理論があり、精細な論究が加へられて来た。然るに宗祖がかうした仏性論には関心を寄せることなく、信心仏性を談じて、仏性の持つ実践的意味を明かにせられたのは何によるのであろうか。

凡そ真宗の聖教にあっては、一切衆生悉有仏性を許す如くであり、また許さざるが如くでもある。即ち涅槃の真因たる信心の信相を明す二種深化にあっては、「自身は現に究悪生死の凡

夫、曠劫已来常に没し、常に流転して出離之縁あることなし」と機相を信ずべきことを説いている。無有出離之縁ということは、一切衆生悉有仏性の教説と如何に関はるのであろうか。ここに於いて、仏性の有無が一個の課題として論議せられて来たのである。

思うに、宗祖が多くの経論釈を引用される仕方は、古来断章取義といはれ、如何なる経論の文もそれが宗祖の体験内容として消化し尽されているのである。即ち、何れの引用にあっても よく経論の真意に徹底して、断章取義せられている。今『涅槃経』を引用される場合もやはりそうであって、我々はまず『涅槃経』に説く一切衆生悪有仏性が如何なる意味であるかを明かにせねばならない。もと『涅槃経』は、釈尊の入滅を悲しむものの為に、如来常住の教を説くものであり、一切悉有仏性ということは、常住の如来として、一切衆生に仏性ありと説くのである。従て一経を貫いて、仏性は涅槃を仏性とすることで貫れている。それ故に涅槃即如来、仏性即如来である。然し他面にまた、『涅槃経』では、信巻引用の文にも示されている如く、四無量心、大信心、一子地を仏性とするのみでなく、十力、四無畏、大悲、三念処等の無漏の法を凡て仏性としているのみか、更には一切の無明煩悩をも仏性とし、遂に、「善男子、夫仏性は一法に名けず、十法に名けず、百法に名けず、千法に名けず、万法に名けず、未だ阿耨多羅三藐三菩提を得ざる時、一切の善不善無化尽く仏性と名く」といって、一切有漏の法までを仏性としている。これは何故であろうか。既に世親は『仏性論』の始めに、衆生をして下劣の心を離れしめんが為」等の五の過失を挙げて、そこに仏の善巧方便を仰がれたのであるが、今『涅槃経』に一 切衆生悉有仏性と説くことも、全く仏の善巧方便と云はねばならない。蓋し『涅槃経』はもと諸法無自性の道理から、一切衆生の根性不定を説くのである。根性不定なるが故に、善縁に遇へば浄縁起し、悪縁にあへば染縁起するのであって、一切衆生悉有仏性といっても、現実に涅槃仏性があるというのではなく、一切衆生は当来に涅槃仏性を得べきものであるから、当得に約して一切衆生悉有仏性というのである。

こうした経意に徹底せられた宗祖は、「如来すなわち涅槃なり、涅槃を仏性となづけたり、凡地にしてはさとられず、安養にいたりて証すべし」と当得に約して明かしていられる。そして仏性を弥陀の妙果、如来の本願力に見られたのであって、一切衆生はまさに仏の光に育れて大信心を得、当来に仏になるべしという形で、一切衆生悉有仏性を説かれたのである。

かくて宗祖は如来回向の大信心を仏性とし、当得に約して因中説果し、信心仏性を明かにせられたのである。かくの如く『涅槃経』の経意に徹せられた宗祖にとっては、理性としての仏性が一切衆生に有るか無いかが問題ではなく、如何にして涅槃仏性を開定するかが課題であり、ここに涅槃の真因たる信心こそ、仏性でなければならぬことを明かにせられたのである。